

(研究ノート)

「ら抜き言葉」の探求 日本語生態学試論

新聞記事を繙きながら

千 葉 貢

一般大衆紙と言われている「新聞」は、国内の事件や事故の報知にとどまらず外国の政治や経済の動向に至るまでを時々刻々の変動に応じて連日記載し報じている。時には国語や言葉に関する記事が掲載されることもあるので、私は毎日ひと通り目を通すように心掛け、必要に応じてメモしたり切り抜いたりすることも忘れない。

そこで、これから新聞紙上に掲載されていた国語(日本語)に関する記事 特に「ら抜き言葉」を中心に抽出し、その実態や真相の追求と共に問題点などについて持論を試みたいと思う。 私には新聞

の記事そのものがすでに問題の所在を明らかにし、考察を促しているようにも読みとれるのだが、いかがであろうか。

去る一九九二(平成四)年九月二十八日(月)付の読売新聞は、「国語」乱れている」75%、「見れる」が「気になる40%」「ならない58%」、「敬語」94%が必要」という見出しを掲げて「総理府世論調査」の結果を次のように伝えていた。

日常の言葉遣いなど、今の国語は乱れていると思う人は七四・八%、敬語を必要だと思っている人が九三・七% 二十七日発表された総理府の「国語に関する世論調査」でこんな結果がわかった。総理府では、「乱れているかどうかの判断は個人が日常使用する言葉遣いに左右されるため、この数字が高い低いの判断は一概には言えない」としながらも、この調査結果を文化庁国語審議会の参考資料とすることになっている。

調査は今年六月、三千人の成人を対象に実施され、回収率は七六・一%。国語の定義は、標準語の意味ではなく、日常の言葉遣い、話し方、書き方など一般的な意味での国語とした。

国語が「非常に乱れている」と答えた人は二〇・四%、「ある程度乱れている」が五四・三%。「乱れている」と答えた割合は大都市ほど高く、性別では、男性が七一・〇%に対し、女性が七七・八%と高くなっている。

乱れていると思う点では、「話し方」を挙げる人が七二・四%と

一番多く、次いで「敬語の使い方」六七・三%、「あいさつの言葉」五一・九%、「新語・流行語」二九・九%などの順。

逆に、「乱れていない」と答えたのは一九・七%で、理由としては「根本的には変わっていない」、「言葉は時代によって変わる」などの意見が多かった。

また、「見ることができる」という意味の「見られる」を「見れる」と言うなど、「国語の乱れの典型的な例として必ず指摘される」（総理府）いわゆる「ら抜き言葉」については、「気になる」が四〇・一%、「気にならない」が五七・九%だった。地域的に見ても、北海道、北陸では「気にならない」がそれぞれ七二・二%、七一・八%と、「ら抜き」がむしろ主流を占めるなどばらつきがみられ、総理府では「ら抜き」も相当一般化してきていると分析している。

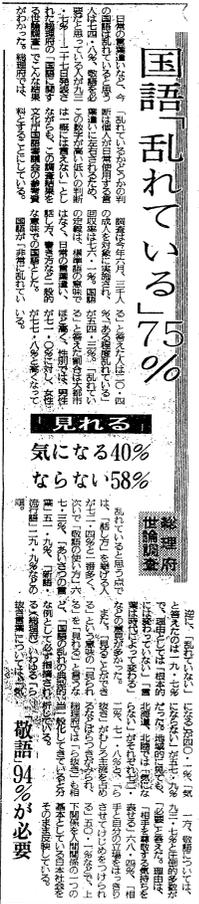
一方、敬語については、九三・七%と圧倒的多数が「必要」と答えた。理由は、「相手を尊敬する気持ちを表せる」六八・四%、「相手と自分の立場をはっきりさせてけじめをつけられる」五〇・一%などで、上下関係を人間関係の一つの基本としている日本社会をそのまま反映している。

翌年の一九九三（平成五）年は第十九期国語審議会が最終報告書をまとめ、文部大臣に提出されたということもあって、「国語」に関する記事や報道が多かったように思われる。私が切り抜きしていたものなからいくつか紹介してみたい。

まず、第十九期国語審議会が最終報告書を、時の森山文部大臣に提出したという翌日の六月九日（水）付読売新聞は、「これではヤバイ!? 日本語の『ゆれ』」「ら抜き言葉」マジで論議を」「19期国語審が最終報告書」などという見出しを掲げて報じていた。その記事の左の横には感想に等しい二人の「識者の意見」として、「今さら効果ない」「論理的検討はムリ」という小見出しを添えて紹介していたので参考までに引用しよう。

若者言葉や「ら」抜き言葉を、国語の新しい課題と認定した最終報告書。どう受け止めるかを識者に聞いた。

「日本語ハツ当り」などの著書で言葉の乱れを批判している随筆家の江国滋さんの話「検討するのなら歯止めをかける方向で検討するべきだ。しかし、それをどこで教えるのか。学校の教師がこうい



同じく六月十三日(日)付の読売新聞は、

「わたしさーア、マジで魚は食べれないの」「ウッソー、信じられナイイ」……。こんなやり取りが当たり前となった若者言葉に、

文部省の国語審議会から「言葉の乱れ、ゆれ」だとクレームがついた。今後、審議会の場で論議を深めていくというが、若者たちの言葉は今、周囲からどう評価され、何が問題点とされているのか。教育関係者や、言葉の問題に関心が深い人たちの見方を聞いた。

若者言葉

「わたしさーア、マジで魚は食べれないの」「ウッソー、信じられナイイ」……。こんなやり取りが当たり前となった若者言葉に、文部省の国語審議会から「言葉の乱れ、ゆれ」だとクレームがついた。今後、審議会の場で論議を深めていくというが、若者たちの言葉は、周囲からどう評価され、何が問題点とされているのか。教育関係者や、言葉の問題に関心が深い人たちの見方を聞いた。

国語審からクレームついたが……

話し言葉の研究テーマに「若者言葉」を交えない普通の日本語を話す……。日本語を話す……。日本語を話す……。同教師は城東学院中で、極力避ける行動様式の若者言葉に本来の言語能力を奪われないと見ている。リポートを厚かまらせて、

話し方使い分け
言語能力は高い
VS
上下関係が薄れて
公私の区別できず

分かれる識者の評価

先生は口づきの観察が、入られた複数の教師による断定的な表現を避けるため、言葉は緩やかにいくもたチーム・ディランに親目。芥川龍之介の『羅生門』を題材に、二人の先生が別々の感想をうつけ合いな、生徒から自分な言葉を「出」から言葉遊びをすすめていく。生徒から自分な言葉を「出」から言葉遊びをすすめていく。生徒から自分な言葉を「出」から言葉遊びをすすめていく。

「わたしさーア、マジで魚は食べれないの」「ウッソー、信じられナイイ」……。こんなやり取りが当たり前となった若者言葉に、文部省の国語審議会から「言葉の乱れ、ゆれ」だとクレームがついた。今後、審議会の場で論議を深めていくというが、若者たちの言葉は、周囲からどう評価され、何が問題点とされているのか。教育関係者や、言葉の問題に関心が深い人たちの見方を聞いた。

「わたしさーア、マジで魚は食べれないの」「ウッソー、信じられナイイ」……。こんなやり取りが当たり前となった若者言葉に、文部省の国語審議会から「言葉の乱れ、ゆれ」だとクレームがついた。今後、審議会の場で論議を深めていくというが、若者たちの言葉は、周囲からどう評価され、何が問題点とされているのか。教育関係者や、言葉の問題に関心が深い人たちの見方を聞いた。

「このような説明を寄せている城生佰太郎氏は、やがて読売新聞の「暮らし」のことは考 第三部 揺らぎと行方」と題するシリーズに登場し、「ら抜き言葉」の問題点や要因について詳しく解説していた。ここでは一九九三(平成五)年十月二十五日(月)付の第一回目だけの紹介にとどめたい。そこには、『乱れ』ではなく『効率化』『単純化』『国際語への変身 産みの苦しみ?』という見出しを掲げ、城生佰太郎氏の言葉を混えながら次のように記されていた。

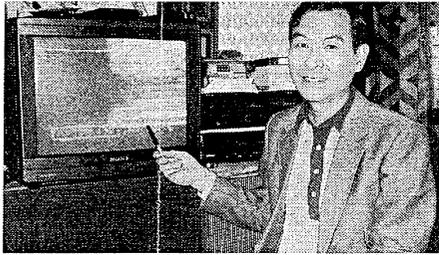
助動詞「られる」には、自発・受け身・尊敬・可能の四つの意味があるが、「食べられる」という「音」を聞いただけでは、四つうちのどれに当たるのか判断できない。城生さんの感じでは、使用頻度は「可能」の用法が約七割を占めている。そこで、言葉の使い手は「可能」だけに専用の語形を作り出し、他の意味と区別して「伝達の効率アップを図った」という解釈。

もう一つ。下一段活用の可能動詞「読める」「歩ける」などは、「読まれる」「歩かれる」

暮らしの知

第一部 揺らぎと行方

1



若者言葉に代表される今の言葉を「日本語は乱れている」と嘆く声がある。だが、「乱れ」は生動物「ら」変化を前向き(と)いえる人もいる。生活圏や人間関係のあかたの急速な変化の中で、言葉の揺らぎを大きくする。見方や意見も多岐多岐。語彙部は、その揺らぎの背景や「ら」からの行方を考えてみた。

「食べられる」を「食べれ
る」、「見られる」を「見れ
る」と言ふ。「ら抜き言葉」
は、動詞「読・受け身・敬」
に「ら」を抜く。

筑波大学助教授(言語学)の城生佰太郎(じようお・はたろう)さんは、まだ大学の学生だったころ、洋画の字解をこなせろ、という先生に「おんなをば」を「おんなを」と思ったそうだ。

二十数年、城生さんを感じさせた「ら抜き言葉」は、使用頻度が

「乱れ」ではなく
「効率化」「単純化」

国際語への変身
産みの苦しみ?!

高まり、今年六月の第十九期国語審議会の最終報告(い)わゆる言葉の乱れや揺らぎの問題」の一例として論議された。

い準備期間を短く白の目を見てもいいなう。市民の二級発明品「と、高圧な見方だ。理由は二つある。

助動詞「ら」には、自発・受け身・尊敬・可能の四つの意味があるが、「食べられる」という「音」を聞いただけでは、四つの中のどれに当たるのか判断できない。

城生さんの感じでは、使用頻度は「可能」の用法が約七割を占めている。そこで、言葉の使い手は「可能」だけに専用の語形を作り出し、他の意味と区別して「伝達の効率アップを図った」という解釈。

「効率化」「単純化」で、さまざまな言葉の変化も説明できる。筑波大のキャンパスなどで観察では、単語の終わりに「ら」を削ぎ、長

来る音はかすつてある。また、舌の緊張を弱くすると子音の発音は嫌わつた。「ら」行音は発音する英語の「r」に音に近づかっている。

「ら」を削ぎ、舌を離して付け、弾くタイミングが難しい。そうした複雑で面倒な発音は避ける傾向にある(城生さん)。

文法面では、複雑な敬語は整理して多くが「単語に単純化」させ、「一切格を持つていらいやない方」に代わつて「お持ちでない方」という言い方が定着してしまつた。「事故」を「各詞を動詞化した簡略」を言ひ回してもまわらない。

これらの変化に対し、「伝統的な日本語が失われる」と危機(きご)する人も少なくないが、城生さん「かつて不規則で面倒な語形が英語が、多くの人の理解を得て、国際語の地位を獲得する過程で、効率化・単純化の繰り返した」と説明。「日本語も今、外国語との接触で変わらねばならず、国際語として姿形を落す必要がある」と話す。国語審議会は「ら抜き言葉」などの論議は今後どう展開していくだろうか。

から変化した。これをひな型にすれば、「食べられる」も、「食べれる」に単純化される。

城生さんは「ら抜き言葉に見られる効率化と単純化が、将来の日本語を考える時、発音、文法、語彙(こい)など、あらゆる側面に進むだろう」と予測する。

などという記述の終わりに、「これらの変化に対し、『伝統的な日本

語が失われる』と危惧(きく)する人も少なくないが、城生さんは、『かつて不規則で面倒な言葉だった英語が、多くの人の理解を得て、国際語の地位を獲得する過程も、効率化と単純化の繰り返しだった』と説明、『日本語も今、外国語との接触にさらされながら、国際語として変身を遂げつつある。これって、進化なんです』と話す

とあり、城生百太郎氏は「ら抜き言葉」が「乱れではなく、「効率化」や「単純化」であり「進化」であるという。

城生百太郎氏の指摘や見解に関心を寄せて私なりに考えていたら、同じ年の十一月十四日(日)付の読売新聞が「若者の話し言葉」の特徴として、「自転車、サークル、ZARD、WANDS……」

「アクセントがない」という見出しに、「マニニアル必要」か「中味の方が大切」か、「狭い交際範囲を反映」か、「はつきり発音」必要なく「などという見出しを掲げて、「若者」たちの言語行動に関する近況について報じていた。

この記事のなかで城生百太郎氏は、「アクセント、イントネーション、間(ま)などをしっかりさせるマニニアルが必要なのではないか」



若者(若手)日本語のアクセントは、微妙な変化が生まれていて「自転車」「サークル」といった単語をアクセントなしで発音したり、「僕」や「チー」を「おれ」や「チー」で発音するのを聞かせる。国語について広く各専門の得意で使分けの、有識者の意見聞いた。交際(かいはい)文化、同年代の歌スター(うたスター)の活躍の、口頭語(くご)も、同じくアクセントなしで使われる。

若者は話し言葉に敏感、最近ではアクセントが特徴(とくちょう)。(東京・原宿)

「マニニアル必要」か 「中身の方が大切」か

音(ね)だもの、東京、大阪、京都、福岡、九州中央、各都府県(各都府県)で開かれた。音(ね)だもの、東京、大阪、京都、福岡、九州中央、各都府県(各都府県)で開かれた。音(ね)だもの、東京、大阪、京都、福岡、九州中央、各都府県(各都府県)で開かれた。

音(ね)だもの、東京、大阪、京都、福岡、九州中央、各都府県(各都府県)で開かれた。音(ね)だもの、東京、大阪、京都、福岡、九州中央、各都府県(各都府県)で開かれた。

自転車、サークル、ZARD、WANDS ……

アクセントがない

狭い交際範囲を反映

「はつきり発音」必要なく

若者の話し言葉

【無アクセント化が目立つ言葉】

自転車	図書館	同好会	二次会	委員会	温度計	生協
入試	電車	バイク	テイルクター	バンド(楽団)	ギャップ	パート、アシパ
マネジャー						

【アクセントの有無で意味が変わる言葉】

彼氏(かれし)	一人だけの正式な恋人	複数の時もある遊び相手
チーム	スポーツや職場の集団	繁華街で遊ぶ若者の仲間
グラマー	大柄で魅力的な女性	英語などの文法
世界史(せかいし)	世界の歴史	学校教科の一つの世界史
パーティー	会合・正式な集まり	集まってる騒ぎ、遊ぶこと
スクール	勉強する学校	趣味・教養などの学校

と述べており、アクセントの型や話し言葉の規範、基準に近づけるべき「マニュアル」の必要性を説きながらも、今日に於ける老若男女を問わず話し方そのものが「間」^マを喪失しつつある「効率化」や「単純化」、さらには省力化、画一化の傾向を証左する事象として肯定し、やがては「乱れではない」「国際語への変身である」と言い、「変化こそ進歩である」として追認するのではないかと思われる。なぜならば、すべての理由づけや要因の説明を、未知にして不可解な「進化」や「進歩」にかこつけて是認する「多数派依存症」「管理語過剰受容症」「自己責任拒絶症」「批判精神麻痺症」や「状況功利主義」(いずれも中島義道『対話のない社会 思いやりと優しさが圧殺するもの』PHP新書)とも言うべき典型的な説明だからである。なるほど「進化」や「進歩」の結果など誰も見届けることができないのだから常に誰も反論することができないのである。進化や進歩には錯覚や幻想も含み、退歩や後退もあり得ることを知りながらも。

若者たちの柔軟な思考や感性は「言葉遣い」に限らず多方面に反映され、改革の契機をもつようになってきた。それはまた政治を変え、激しい歴史を創りだす原動力ともなってきた。そうした改革の原動力は「社会の要請」や「時代の趨勢」などとして顔で言われがちな、現状に追従したり迎合したりする安易な肯定ではない。むしろ、大衆の流れに伍することなく強烈な自己愛的同一性(identity)や緊張感(heroic)などの発露や具現によって構築されてきた歴史を知るべきであろう。一知半解に等しくとも、最もらしい解釈や説明を施したがるのは、識

者を自負する人の強迫観念でありおためごかしの小賢しさである。有為転変の歴史は識者と称する人の解釈や説明によって理解されるものではなく、また語り尽くせるものでもない。

歴史の大事は流れに乗じて「単純」に「効率」よく運ばれた試しはなく、むしろ邪悪な流れに妨げられ、難行苦行を強いられながらも本願や本望の成就を期して加担に挑んできたのである。今日とて、そうした志半ばにして倒れて逝った人々の情熱に支えられていることに思いを致し、継承すべき大事な責務を忘れてはならないと思う。今や、変化を進歩と見做し、開発を発展と嘯ぶき、そして居直る利害得失の打算と効率一辺倒の近代合理主義や進歩発展至上主義の終焉を告げるべき末期のときが来たのである。その必然に関する色々な指摘は多くの識者や専門家、学者と称される人々の、しかも大人たちの解釈や説明に威を借りるよりも一人の若者の告白を紹介すれば事足りるのである。その一例として、去る一九九四(平成六)年二月二十二日(火)付の読売新聞の「投書」欄に掲載されていた女子大生の全文を紹介したい。それは「若者に感じる精神的貧しさ」という見出しに続いて、「大学生東島恵理20(千葉県八千代市)」とあり、次のように記されていた。

アルバイト雑誌などを読んでみると、巻末に「募集」というコーナーがある。サークルのメンバーなどを募集しているのだが、時々、友達の募集を見かけることがある。

「寂しいから」という人が多いようで、今の若者の精神的貧しさ

を感じてしまう。物質的には満たされていても、精神的には空洞が大きいのではないか。だから、全国誌にまで投稿しないと仲間も作れない。

私自身だって、例外でない。身近に友人はいるが、親友と呼べる人が一体何人いるだろう。友人だけではなく、家族間でも同様だ。共働きの家庭が増えてきたせいか、基本的なコミュニケーションもない家庭が増えてきている。

最近の犯罪の凶悪化や低年齢化も、この「寂しさ」が原因の一つなのではないか。これからの時代に、私たちが求めていくべきものは、経済的なものより、精神的な豊かさだろう。

社会の近況や若者の心情を代弁していると思うのだがいかがであるうか。私は「ら抜き言葉」の遠因も、今日に於ける「ムカつく」「キれる」という若者たちの心も等しく「寂しさ」にあるのではないかと思う。

人は社会的に存在するのだから社会の動向や風潮に感化されないわけにはいかないだろう。「近代化」を国是とし、進歩発展開発至上主義の一環として経済的な繁栄を求め続けてきた結果に等しい高度文明社会を迎えつつある今日にあって、大いなる未来をもつ若者たちが「寂しいから」と存在の不安を訴え、「精神的には空洞が大きい」と自己批判し「仲間も作れない」と嘆く。さらには「最近の犯罪の凶悪化や低年齢化も、この『寂しさ』が原因の一つなのではないか」と自己

分析も含めて告白している。これらの要因は性急に、かつ短絡的に「近代化」を是認し模倣し、進歩発展開発を偏重してきた「高度文明社会」「高度情報社会」への過程に伴う必然的な反動や悲劇であり、徒らに追従や迎合、同調したがる「優しさ」「思いやり」の誤解や陥穽、矛盾でなくて何んであろう。

重ねて言うまでもなく、私たちの「寂しさ」を生み出す原因は人間関係にとどまるものではなく、政治や経済の施策に伴うことをも忘れてはならない。例えば、「現代における大量消費経済社会、コモディヤル社会においてマスコミを通じて絶えず『自己』の欠乏が刺激され、決して自己満足させないような永続的不満創出機構が本質的に作動している、と言ったら言い過ぎであろうか。」⁽²⁾ という影山任佐氏の指摘に教えられるまでもなく、「大量消費社会」「コモディヤル社会」に限らず、「社会」には必ず「言葉」が介在しているという極めて当然のことを軽視してはならないのである。即ち、私たちは「言葉遣い」によって心の持ち方やあり方、手振り身振りの仕草に至るまで、微妙にして詳細に創られてきた習慣や伝統を想起すべきであろう。

「国語が精神をつくる」この命題とも箴言ともいふべき真実を閉却し、「言葉の変化は進歩である」とする進歩依存症ともいふべき安易な進歩観や、「すべての変化や進歩は時代の趨勢であり社会の要請である」とする軽薄な現況肯定観などが国語（日本語）の歪みと共に心の乱れを助長し、豊かなものに遮られた希薄な人間関係に起因する「寂しさ」を生み、「犯罪の凶悪化や低年齢化」をも即発している

のだということに覚醒すべきなのである。

人は言葉によって人になる　人は言葉によって育まれ、言葉によって創られ、言葉で考えては言葉を伝える。政治は言葉で施され、機械は言葉で動かす、という身近な習慣を看過し、言葉の存在や言葉の機能を忘れてきたのではなからうか。こうした言葉（国語）の軽視や粗雑な扱いは、必然的に心の歪みや乱れを生み、「寂しさ」に伴う暴力や犯罪をも生み出すという深刻な弊害となり、反逆の恐怖に怯えるまでになった。今や遅しとばかりに、言葉のもつ力量や圧力、言葉が醸し出す普遍的な尊厳を知るべきであろう。私の言う言葉の普遍的な尊厳とは、言葉に宿っている霊威である。古人はそれを言霊ことたまと称して崇めてきた。だから「言霊」と命名された目に見えぬ伝統や習慣を畏怖し続けてきた今は亡き人々の思いや言動を想起し、身をもって継承し続けなければ心身の平穩無事をもたらしめる救済の道はないのではなからうか。「温故知新」「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」と先師の教えを思い出すまでもなく、何事でも洗練されてきた古典の回復なしに真の安定や安穩などあり得ない。過去を省み未来を創造する上でどうして古典（classical）洗練されたもの（的な精神がそれらの妨げにならう。

今日の私たちは何事をも「近代化」に伴う進歩発展の成果と見做し、「高度文明社会」「高度情報化社会」であると嘯き、獲得することばかりに主眼を奪われ、心血を注ぐあまりに、喪失されていくもの事に対する愛惜の思い、事件事故、犯罪に対する驚愕、嫌悪感などが希薄化

し無神経ぶり無頓着ぶりを装っている。それは「近代的」にして「進歩的」と自認する生活を営みながらも、未だに「古典」に等しい言語習慣や生活習慣に支えられながら安心立命を得ているという傲慢な生き方に気づいていないのではなからうか。なぜならば佐伯啓思氏が「自らを潔白化するという行為自体に、戦後的なるものはある疚しさを感じ続けてきたはずなのである。この潜在的な疚しさが、戦後民主主義者に対して、過剰に道徳主義的、正義論的スタンスを与えることとなったのではないだろうか。責任を追及するという正義の実践によって、内部にある疚しさを外部に転化するという心理規制が働かないとは言えない⁽⁴⁾。」などと見事なまでに喝破したところの「現代民主主義の病理」の一症状である、といつては言い過ぎであろうか。小浜逸郎氏もまた、「現代の道徳的正義の觀念の尺度でかつての社会を裁断する」という私たちの態度の背景には、無意識のうちに進歩主義イデオロギー特有のオプチミズムと傲慢が潜んでいることを指摘しておきたいのだ。」と述べた上で、次のように続けている。

たとえ現在の私たちの感覚から見て、かつての社会の規範や慣習にもとづく感覚を受け入れたいと感ずるとしても、それを根拠に、かつての時代の考え方は「間違つて」おり、今の考え方こそ「正しい」という価値判断を安易に下すべきではない。というのも、そういう態度を取ることは、歴史が「悪い」方から「よい」方に進んでいるという単純な進歩史観に立つことを意味するからであり、それ

は私たちの時代そのものに対する健全な懐疑精神を隠蔽することにつながるのである。⁽⁵⁾

安易な平等観や進歩発展至上主義の傲慢さを隠蔽するかのようなら「やさしさ」は責任の転嫁であり虚構の正義であることを見逃してはならないのである。即ち、「やさしさ」にかこつけた偽善的な内容や表現を見抜いたり抵抗したりする国語の力や言語感覚が必要なのである。「やさしい言葉遣い」はかえって心の歪みや乱れを生み出す温床であり要因である。「やさしさ」に包まれた「高度情報化社会」は心の歪みや乱れを助長する落とし穴があるのだということをも知るべきなのである。そこで加賀野井秀一氏の説明を借りることにした。

事実、私たちのまわりにとびかうアナウンスや広告や日常会話の類いを見ると、そこには、紋切型の美辞麗句、おためごかし、スローガン、効率をあげるための指示の言葉、マニュアル言語、おかしな日本語、等々が、まさしく「あいまい」な姿で満ちあふれている。それらのなかには、血のかよった個人の言葉は見られず、誰が何のために語っているのかさえ、よくわからないものが多いのである。検討してみれば、やがてこれらのなかからは、空っぽのフォーマリテイ、言葉の言いかえによる現実の隠蔽、言葉信仰、忌み言葉のタブー、ソフトな管理、洗脳、人々のロボット化といったさまざまな危険が見えてくるようになった。

そして、さらに加賀野井秀一氏は『正義』や『平和』や『民主主義』といった言葉の前で思考停止しているにもかかわらず、それを連発するだけでしたり顔になる自己欺瞞の輩は、これよりはるかに恐ろしい。⁽⁶⁾とも述べている。私は「研究」に携わり「論考」づくりに勤しむ輩のひとりだけに、自重や自戒を促す意味からも大いに共感した。こうして「言葉」に関する新聞記事を抽出し私なりに考えていると、「言葉」の問題は社会の動向と無関係ではないということ教えられた。「国語が乱れている」と思う七五%の人がいても、「見れる」が「気にならない」人が五八%もいるという現実。「旧中山道」を「いちにちじゅうやまみち」と読んだというアナウンサーがいて、「はつきり発音」しないために「アクセント」が平板化していく若者たち。「ら抜き言葉は許しません」というアナウンサーがいて、「ら抜き」を「効率化」「単純化」と解釈し、「進化」と見做す識者もいるという世の中、世間、社会の有り様 生態を細くことができた。何事についても色々な見解や判断があつて然るべきなのだが、私はこの身にも等しい「言葉（国語）」だけに決して無関心、無感動、無責任、無気力などではられない。血肉が命を支える素材であるとするならば、言葉は心を育む資糧なのだ、ということをつくづく思った次第である。

(ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授)

(注)

- (1) 中島義道『対話のない社会 思いやりと優しさが圧殺するもの』PHP新書⁰³² 平成九年第一版第一刷、平成十年第一版三刷。第二章の九七頁や第五章の一七二頁以下などを参照した。
- (2) 影山任佐『空虚な自己』の時代』NHKブックス⁸⁵⁰ 平成十一年。一〇三頁より引用した。
- (3) 千葉貢・唐戸民雄・河内昭浩『国語表現のひずみ 現代言葉遣い事情』高文堂出版社、平成十一年。筆者が分担執筆した第一章、言葉の「合理化」「は」「社会の要請」か(十四頁以下)を参照して戴ければ有難い。本稿は小著の続編でもある。
- (4) 佐伯啓思『現代民主主義の病理 戦後日本をどう見るか』NHKブックス⁷⁸⁸ 平成九年。一二四頁から一二五頁にかけて引用した。
- (5) 小浜逸郎『弱者』とはだれか』PHP新書⁰⁸³ 平成十一年。四三頁より引用した。
- (6) 加賀野井秀一『日本語の復権』講談社現代新書¹⁴⁵⁹ 平成十一年。一七五頁、及び一八〇頁より引用した。
- (7) 稲村博『若者・アパシーの時代 急増する無気力とその背景』NHKブックス⁵⁷¹ 平成元年第一刷、平成二年第四刷。社会状況を詳細に分析しながら説得力に満ちた説明が施されているので是非参照して戴きたい。